広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

日本には地域に根差した伝統や産業、文化を守りながらも常識にとらわれない自由な発想で価値を創造する若者が増えている。日本のモノづくりを支え続け、新たな価値を生み出してきたLEXUS。「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催＝LEXUS）は各地で独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む若き「匠（たくみ）」を応援している。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

2020年に向けてインバウンド（訪日外国人）需要の急速な拡大が見込まれる日本。地域の観光客誘致やさらなる産業振興には各地が独自性の高い価値を創造し、それらを海外に向けて積極的に発信することが求められる。

全国では伝統産業・文化をベースに新たなプロダクトを創り出そうとする若者が増えてきており、世界から注目を集めている。同プロジェクトは全国の各新聞社とパートナー団体、スーパーバイザー、サポートメンバーの協力により、LEXUSが各都道府県の若き匠を選定、サポートすることで彼らの全国や世界での活躍を応援するもの。スーパーバイザーには放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッションジャーナリスト／アートプロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らがサポートメンバーとなって発足した。

第1回となる今回は、全国47都道府県から計52人の若き匠が選出された。

昨年夏にはプロジェクトの皮切りとなるキックオフ・セッションがLEXUS高輪で開催された。同セッションには選出された全国の匠が一堂に集結。オリエン後にサポートメンバーから個別のコンサルティングが行われた。その後、サポートメンバーが全国にある工房を実際に訪ねるエリア・コンサルティングや、地元のLEXUS販売店スタッフとの意見交換などを重ね、匠は自身のアイデアを磨きプロダクトづくりに取り組んだ。

11月にはスーパーバイザー、サポートメンバーがプロダクトの進行状況を確認する「プレ・プレゼンテーション」を実施。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」などスーパーバイザー、サポートメンバーから真剣なアドバイスが寄せられた。試行錯誤を経て、プロダクトを完成させた。

今年1月18日に都内で行われたプレゼンテーションでは国内外の百貨店、セレクトショップバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーション。文字通り世界へ羽ばたく足がかり、ビジネスチャンス拡大のきっかけとなる機会を手にした。

最先端のエンジニアリングと伝統的な匠の技の融合によって創り出されるLEXUS。そのデザインフィロソフィーである「Lfinesse（エルフィネス）」とは、Leading-edge（先鋭）とfinesse（精妙）の二律双生（一見矛盾する事柄を調和させて新たな価値を生み出すこと）を意味する造語だ。これによって新たな価値への昇華を表している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」に広く発信する。LEXUSが掲げる二律双生を、地域創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。一般公募で選出されたデザイナーの秋山かおりさんと作陶家の安藤騎虎さんのモノづくりにかける思いと完成したプロダクトを紹介する。

サポートメンバー下川氏（右）と匠の2人

1月18日、プレゼンテーションにて

プレ・プレゼンテーションでアドバイスするサポートメンバーたち

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

自分だけの時間を取り戻す時計

秋山 かおり　東京都／デザイナー

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT一般公募選出の秋山さんが今回デザインした置き掛け兼用時計「OO:WW（Our Own:With Wood＝オーウ）」のプロダクトコンセプトは「一度、立ち止まってみませんか」。木という生きた素材を使用することで、「他人と共有する時計ではなく多忙な日常から解放され、自分だけの時間を取り戻すための時計をつくりたかった」と秋山さんは語る。

デザイナーである秋山さんの木との出合いは4年前。小径木を独自の薬剤に2週間ほど漬け込んで乾燥させてみると繊維質だけが残り、年輪と直交する道管があらわになった。

あたかも木が呼吸しているかのようなテクスチャー（質感）の魅力に引き込まれた秋山さん。この素材を文字盤に使うことを思い立った。

バリエーションは3種類。木々のぬくもりを感じながら洗練された印象の「ASA」（ホワイト）、生きる力を感じさせる「HIRU」（レッド）、静かに一日を終える「BAN」（ウォームグレー）だ。

全国の匠と接点 今後の協業に意欲

全国有数の門前町として今もにぎわいをみせる大田区池上。親戚が多く住んでいたこともあり、秋山さんは「幼少のころからよく遊びに来ていた」という。

現在、秋山さんの自宅兼オフィスはその池上にある。近くには700年以上続く寺院があり、「そんなゆったりとした時の流れが今回のアイデアの原点にある」（秋山さん）。

「OO:WW」の制作過程ではサポートメンバーからの貴重なアドバイスをプロダクトに落とし込んだ。下川氏からの「文字盤から時針・分針のそれぞれの距離をできるだけ詰めたほうがデザインに一貫性が出てくるのでは」の助言には、時計メーカーと協力しながら針の位置の改良を繰り返した。

プレゼンテーション当日は多くのバイヤーがブースに立ち寄ってプロダクトを手に取る光景が見られた。バイヤーからは「文字盤の表情が独特で、木材に見えない」「引き込まれるようだ」といった反響があった。

「今回のLEXUS NEW TAKUMI PROJECTを通じて、これまで接点のなかった全国の匠と知り合いになれた。彼らは伝統を守りながらも若い感性で新たなモノづくりに挑戦している。将来はコラボレーションしてみたい」と秋山さんは意気込みを語る。

秋山 かおり

2002年千葉大学工学部デザイン工学科を卒業後、イトーキでオフィス家具の商品企画・デザイン・カラースキームに携わる。同社退社後、オランダのデザイン事務所サミラプーン勤務を経て帰国。東京を拠点としたデザイン事務所STUDIO BYCOLORを設立。グッドデザイン賞、DESIGN PLUS賞（ドイツ）など受賞のほか、ミラノサローネをはじめとする国内外の展示会に出展。

全3色のラインアップ「OO：WW（オーウ）」

ハンドドリップコーヒー〝備前〟で手軽に

安藤 騎虎　岡山県／作陶家

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT一般公募選出の安藤さんは、工芸色の強い備前焼をもっと気軽に使ってもらえるものにしたいと活動する気鋭の備前焼作家。本拠、鳴瀧窯のショールームには皿やぐい飲みなど普段使いの品が並ぶ。提案した1人用コーヒードリッパーセット「nagom」にもそんな思いを込めた。備前焼本来の質感が光るカップとドリッパー、蓋を重ねて一体化。こだわり派に欠かせないネルフィルターを備えるとともに、手軽にペーパーフィルターを使う際の補助器も内蔵する。持ち運び用の竹かごも試作した。

備前焼の里で鳴瀧窯を構える

「備前焼は無釉薬（ゆうやく）焼き締めを特徴とする〝呼吸する器〟。コーヒーもおいしくなるといわれる。ちょっとした隙間時間に本格ハンドドリップコーヒーを備前焼の器で味わって〝和んで〟もらうためのセットを目指した」

「プレゼンテーション会場では多くのバイヤーと話ができた。備前焼は工芸品で普段使いに向かないというイメージを持つ人が多かったが、備前の土の機能性を前面に出しコーヒーを淹（い）れる道具へシフトさせたコンセプトに共感してくれた。一体の筒型になるフォルムにもご好評をいただいた。じっくり商談を詰めていきたい」と冷静に語る安藤さん。展示した作品は電気窯で焼いたものだが、登り窯で焼くプレミアムバージョンをラインアップする予定で2人用セットも考えている。

イメージ変えたい 思いを具現化

このプロジェクトへの応募に際し、安藤さんは「備前焼全般の需要創造につながるきっかけになるよう、デザイン要素などを取り入れて門戸を広げたい」と強い信念をもって臨んだ。

キックオフ・セッションから最後のプレゼンテーションまでを「あっという間だった」と語るが、試行錯誤の連続だった。一体型のフォルムをネルフィルターの持ち手が壊さないか悩んでいたとき、エリア・コンサルティングで岡山を訪れたサポートメンバーの下川氏から「隠さない方が、道具感が出ていい」と助言され吹っ切れた。プレ・プレゼンテーションではカップに入る量が少ないのではと懸念され見直した。そのすべてが最終的なプロダクトに結実した。

「多彩な分野の全国の匠たちとの交流で何かが生まれる可能性を感じている」。匠たちの融合にも期待できるかもしれない。

安藤 騎虎

1977年神奈川県生まれ。料理への興味が次第に食器への関心に移り、作陶家を志す。2003年備前陶芸センター修了後、備前焼作家橋本和哉氏に師事。田部美術館「茶の湯の造形展」に2度入選後、08年に独立。他のデザイナーとのコラボレート作品も積極的に制作。備前焼（やきもの）から日本の食やライフスタイルへの新しいアプローチを目標に活動している。

備前焼の質感が光るコーヒードリッパーセット「nagom」